

知性の雫

森野 水琴

男は銀座のクラブでくつろいでいる。新人が入ったとのママからの電話に来店したというわけである。これも常連客の特権と微笑んでいるところに、ママが新人ホステスを連れてきた。きょうが初日とあって女は緊張している。まずは三人で乾杯して暫し談笑している。男はママに指名の合図をした。今宵はゆっくり楽しむつもりらしい。

女の声に男は心地よさを感じた。この声で授業してくれば勉強したのにと悔しがるほどであった。どこかで声のトレーニングを受けているのかと尋ねると、朗読のトレーニングを受けたとのこと。昼は朗読を聞かせる店で働いているようだ。是非とも朗読を聞かせてもらいたいものだと言うと、昼の店の名刺を秘かに手渡した。

翌日、男は出社するや否や女の店に電話した。女が案内してくれるというので訪問することにした。男は父親が経営する会社の企画部所属になっているので、平日の九時に出社さえすれば良く、あとは自由に会社の経費で企画活動できる。昨夜の銀座のクラブも企画活動になる。

男は次男で、会社は兄が継ぐことになっている。子供の頃から勉強が嫌いで、遊んでばかりいた。いわゆる落ちこぼれである。それでも大学までは親が言うがままに通った。就職活動する気もなく、父の会社に転がりこんだというわけである。

そんな男が女の声に惚れ込んだ。電話での声も拔群だった。女の店への訪問は外勤扱いになり、そのまま直帰すると会社に告げて、男は女の店へ軽やかに向かった。

女の店に着くと早速店内を案内してくれた。朗読者ごとに部屋が分かれていて、客は部屋を選んで次の朗読を待つ。三十分朗読すると十分休憩。昼休みは一時間となっている。通常は朗読者が本を選ぶのだが、客が少数の場合、客のリクエストに応じる場合もある。特に予約が無い場合は貸切にして連続して聞くことも可能である。女に予約の有無を尋ねると、無いと言う。男は喜んで貸切にしてもらった。

読んでもらいたい本はあるかと尋ねられ、男は勉強が嫌いで国語の教科書も満足に読めないと告白した。「それでは国語の教科書を朗読しましょう」と女は

答え、小学一年から高校三年までの国語の教科書を二冊ずつ持ってきた。「何年生の教科書から読みましょうか」と尋ねられ、「小学一年から」と男は即答した。女から小学一年の教科書を受け取り、女の朗読を聞きながら眺めた。あんなに嫌いだった勉強が、こんなにも楽しい。昼休みを入れながら十七時まで至福の時を過ごした。

翌日の貸切を予約し、夕食を共にして、銀座のクラブに行った。「連日のご来店ありがとうございます」とママに迎えられ、三人で再会の乾杯をした。

男が銀座のクラブで女に会ったのは月曜の夜であった。火曜から女の店で朗読を聞くようになり四日連続、もう金曜である。

「今週は皆勤賞ですね」とママは微笑んで迎える。今宵も三人で乾杯して皆勤の宴が始まる。

土日に逢えない分、たつぷり女の声を聞いておこうと男は耳を傾ける。心地よい声に自然と男の身体が揺らぐ。

「また来週」と女とママに挨拶して男は帰っていく。土日は別というのが男の遊び方である。

月曜日に男が出勤すると、九時十分に社長室に行くようメモが置いてあった。連日の銀座通いを怒られるのかと社長室に行くと、社長の隣りの席に女が座っている。驚く男に父である社長は「これからは会社の一室で朗読を続けるといい」と言った。

女の店との共同研究をするために開発部の一室で測定するのだという。教材は国語の教科書で、おさらいを兼ねて小学一年から始めることになった。女の声と男の脳波が記録されていく。

十七時になると女は朗読を終えた。男は女と夕食をともにして銀座のクラブに移動した。

女が男の会社に出向という形になった事はママの耳にも届いていた。

父がクラブに出資していて、いわば雇われママなのだから知っていて不思議はない。

父は女の店にも出資していて、女を新人ホステスとしてクラブに入店させ、声で息子を虜にし、女の店との共同研究に役立てようとする企画は成功したことになる。

女も仕事のあと男とクラブで談笑するのが好きになったようで、当面は一日の半分ほどは男と過ごすことになる。
もちろん男は女の声を毎日堪能するのが仕事になっているのであるから大満足している。

翌日、朗読の時間になると、男は昨日のおさらいを兼ねて一緒に読んでみたいと女に頼んだ。それは素晴らしいと女も同意して昨日の分をふたりで朗読した。何とか一日で朗読し終えた。

それから、まず女が一頁朗読し、続いてふたりで朗読するというスタイルで読み進んでいった。

高校三年の教科書を読み終えると、男は次に源氏物語を読みたいと女に頼んだ。女は微笑みながら、与謝野晶子による口語訳を男に手渡した。朗読するだけで五十数時間かかる分量である。男の眼が輝く。

ようやく源氏物語の口語訳を朗読し終えて、男は女とともに銀座のクラブで打上げの宴に興じている。平日は毎晩クラブに来ているとはいえ、読了の宴は格別である。

明日からは源氏物語の原文を朗読することになる。原文と口語訳の対訳本を使う予定である。

翌日、女は紫式部の口調を想像しながら原文を一頁朗読する。続いてふたりで朗読して読み進んだ。

口語訳の朗読と似たような時間で原文を朗読し終えた。読了の宴はクラブで盛大に行われている。ママもここまで続くとは思っていなかったらしく感心している。

ひとまず国語は区切りとし、明日からは算数の教科書を朗読することにした。女は大学時代に家庭教師をした経験があり、高校の数学でも朗読することはできる。

翌日、女は小学一年の算数の教科書を男に渡し、一頁ずつ朗読していく。

練習問題は解かないで省略することにした。その代わりに一冊読み終えたと最初の頁に戻り、三回読み終えてから、次の学年の教科書に進むことにした。

同じ本を三回繰り返すのだから、それだけ時間がかかるのだが知識が沁みる感覚がして男は満足している。

何とか算数と数学を読み終えると、クラブで恒例の読了の宴が行われた。明日からは社会の教科書を朗読することにした。

翌日、女は小学一年の生活の教科書を男に渡した。小学三年からは社会の教科書になる。算数、数学と同様に同じ本を三回繰り返すことにした。

社会も読み終えて、男はクラブでくつろいでいる。

明日からは理科の教科書を朗読することにした。

翌日、女は小学三年の理科の教科書を男に渡した。小学一年と二年は生活の教科書で朗読済みである。

理科も読み終えて、クラブで読了の宴。

明日からは再び国語に戻って、教科書を暗唱することにした。

その頃、男の会社の開発部は膨大な朗読データの解析に追われていた。

女の朗読する声の間合い、ゆらぎが分析される。あわせて男の脳波との関係も解析される。

女が朗読している部分だけををつないで朗読用教材も作られた。

女の声の特性はAIが読み上げる音声に反映され、あたたかみのある人間の声に近いものになった。女の会社との共同研究にも役立っている。

女の音声を文字にする研究から、耳の聞こえない人へ字幕を提供する眼鏡も開発されている。

眼の見えない人用の眼鏡から見える画像をもとに、音声でガイドしイヤホンで聞いてもらうシステムも開発されている。

これらの研究に欠かせない貴重なデータのおかげで、男は連日朗読にクラブにと励んできた。

父にも後継者になる予定の兄にも男の功績は認められている。

なお外国語については、別チームが開発していることから今回の朗読から除外された。

翌日、男が出勤すると、社長室に行くようにとのメモがあった。以前にも、このようなことがあったと思い出しながら社長室に入ると、やはり女も居た。

きょうから教科書を暗唱するということは既に社長の耳に入っていた。教科書全てを暗唱できるようになるには相当の時間を要するので、これを機会に結婚して、じっくり取り組んではどうかと社長が提案した。ふたりは快諾した。新居はクラブのママが手配してくれている。家政婦も付くので安心して暗唱に集中できる。一週間ふたり一緒に休んでのんびりするようにとのことであった。

女はクラブを辞めることになり、その夜はクラブで送別の宴が盛大に行われた。

一週間後、ふたり一緒に新居から出勤し、小学一年の国語の教科書の暗唱が始まった。

女が最初の一文を暗唱する。続いてふたりで暗唱する。それから男が暗唱するのだが失敗したら出来るまで繰り返す。

次の文も暗唱できるようになると、ふたつの文をまとめて暗唱する。こうして一文ずつ増やしていき、一頁暗唱できるようになると、二頁めの最初の一文を暗唱する。

二頁めが暗唱できるようになると、二頁まとめて暗唱する。

この調子で一冊暗唱するには相当の時間がかかる。

適宜休憩しながら午後五時まで暗唱に没頭している。

何日かかっても全部暗唱できるようになりたいと決意して、ふたりは新居へと帰っていった。

開発部は新しい画像データの解析に追われている。

半年して女が懐妊した。社長も男も大喜びである。

女の産休中は女の店から別の女性が派遣されることになった。暗唱のおさらいと源氏物語の原文朗読のおさらいを怠けないようにとのお目付け役である。

その女性も夜は銀座のクラブで働いているのだが、結婚して以来、新居に直帰している男はクラブに立ち寄っていない。

類は友を呼ぶというが、ふたりの女性の声は間合いもゆらぎも似ていた。開発部もデータの蓄積と解析に余念が無い。

産まれたのは女の子であった。男は産声を聞きながら至福の時を過ごしている。将来が楽しみな声である。女の子は知恵ちえと命名された。

出産後、女は一年間の育児休業となった。男は将来の暗唱に備えて、源氏物語の原文を少しずつ暗記し始めた。

明日から女が育児休業を終え復帰するというので、お目付け役の女性の送別会が銀座のクラブで行われた。男も久しぶりにクラブで談笑している。お目付け役の女性に大学時代の同期の男を紹介した。同期の男も女性の声に惚れ込んだようである。

翌日、女は知恵を連れて復帰した。知恵の脳波も記録したいという開発部の願いは叶えられた。

産休前までの暗唱の確認が終わり、続きを暗唱していく。両親の姿に知恵は上機嫌である。

何とか国語の暗唱が終わり、数学、社会、理科へと続く。

小学一年から高校三年までの教科書が、すっかり男に沁み込んだ。

いよいよ源氏物語の原文を暗唱することになった。

最初の一文を暗唱していると知恵も参加してきた。

毎日両親が暗唱しているのを見ていて興味を持ったらしい。

さすがに母と娘、声がそっくりである。

男にとって暗唱が至福の時間になった。

桐壺きりつぼの巻の暗唱が終わると、帚木はきぎの巻の暗唱、そして二巻通しての暗唱。

八巻を超えたあたりから通して暗唱するには続きを翌日に繰り越すようになるが、何とか五十四巻全て暗唱することができた。

ごく自然な流れで与謝野晶子の口語訳を暗唱していく。

口語訳も暗唱し終えて、親子三人に源氏物語が沁み込んだ。

三人は源氏物語の毛筆で書かれた写本の画像を見て、美しい筆跡にうっとりしている。

女は書道で変体仮名へんたいがなを習ったことがあるらしく、暗唱しながら説明していく。男と知恵は目を輝かせて聞き入っている。

知恵は未だ学校に通っていないのだが、文字を絵のように見ているらしい。まずは極細のサインペンで、最初の一文を見よう見まねで書いてみることにした。まずまずの出来である。

こうなると最後まで書かずにはいられない。何日もかけて書き終えて三人は微笑みながら、次は毛筆でと声を合わせて言った。

女が朱の墨で手本を書く。男と知恵は手本を見ながら書いていく。一文を四回書いて清書し、次の文に進む。サインペンで書いた時は一回書いたただけだったので、単純に五倍の時間をかけて書き終えた。

知恵が小学校に通うようになった。

教科書を朗読するのがずば抜けて上手だと担任の先生に褒められた。母の声を聞いて育ったのであるから当然と言えば当然である。

父が何度も間違いを直されながら暗唱している背中を見ながら育ったのだから、知恵も教科書を暗唱できるようになった。

見る見るうちに知恵に知識が蓄積されて潤っていく。

両親が与えた知性の雫は知恵の心に泉となっていく。

きょうも知恵の心の泉からあふれる言葉が教室に響き、一同が聞き惚れている。

両親は開発部から依頼されて外国語教育システムのモニターになっている。

まずは英語から大量の例文を前にして暗唱し始めた。

英語の次はフランス語と言語の数だけ果てしない暗唱の旅が始まる。